

情報環境の変化を回顧すると

古瀬 敏（静岡文化芸術大学名誉教授）

広瀬さんの話を聞きながら、昔のことを思い出していた。もう30年以上前、1990年ごろに米国を訪問した際のやりとりである。当時は、米国でもそもそもキーボードを触ったことが一度も無かった高齢者がけっこういて、せつかく使えるようになっていてもパソコンでメールするのに臆病で手を出さないという。タイプライターの長い歴史があるところでもそうなのか。タイプライターの歴史がない日本ではもっと難しいだろうな、と思ったことである。

もちろん、昔のタイプライターは入力してもアウトプットは目で見ないといけなかったので、視覚障害者向けの情報入手手段としては不完全であった。キードがコンピュータになって入力したものがデータとして扱えるようになり、それを点字でプリントアウトできるようになって初めて出力が視覚障害者にとって意味を持つようになったわけである。

データになったからには、点字でのプリントアウトだけでなく、もしそれを読み上げることができれば視覚障害者にとってもっと便利になるというのはわかっていたが、それが現実になるには時間を要した。

2007年発売のiPhone、画面のタッチだけで操作するという話を聞いて、視覚障害者はいったいどうするのか、物理的なキーボードであれば入力できるけれど、触って判断できない画面では困るだろうと疑問に思った。ところが、必要なら初期設定で読み上げ機能を視覚障害者用に設定でき、読み上げさせて操作できるという。まさかと思っていたが、米国の視覚障害者はまたたく間にそれまでの携帯電話からiPhoneに乗り換えたということだった。これはアルファベットで綴られるゆえに日本語のように漢字カナ変換を経由しない有利さがあり、単語ごとの音声読み上げのためのデータ登録も可能だったからだ。

現在は日本語でも問題なく読み上げさせられるし、それだけでなく音声で操作することも可能であり、必要なら聴覚障害者が音声情報をテキスト表示させることもできるようになっている。昔のテキスト電話（聴覚障害者がキーボードを叩き、交換がそれを読み上げて相手方のふつうの音声電話とのやりとりを仲立ち）機能がソフトウェアで実現されているわけだ。もちろん盲ろう者の場合、点字ディスプレイか指点字などを介しないと情報が受け取れないので、もう一つ介在するものが必要だが、以前に比べるとハードルが著しく低くなったのはまちがいない。

状況がそうならみると、リアルな物理環境の改善の難しさが逆に浮かび上がってくるような気がする。